ヴェルナー・ベーツィンク著
『原野とレジャーパークの狭間に―アルプスの将来についての論争の書』

ロートプンクト出版 , 145頁．チューリッヒ．2015年刊

小野　昭

資源環境と人類　第11号　135-140頁　2021年3月
Natural Resource Environment and Humans
No. 11.　pp. 135-140.　March 2021

資源環境と人類　第11号　135-140頁　2021年3月
Natural Resource Environment and Humans
No. 11. pp. 135-140. March 2021

書評

ヴェルナー・ベーツィンク著『原野とレジャーパークの狭間に―アルプスの将来についての論争の書』

ロートプンクト出版，145頁．チューリッヒ．2015年刊

小野　昭[1]*

1．はじめに

明治大学黒耀石研究センターは，ヒト－資源環境系の多様なテーマを包摂して研究を進めているとはいえ，今回書評にとりあげたW.ベーツィンクの著書には遺跡の問題はあつかわれていない．現代のヒトの活動と広義の自然環境の問題が中心であるので，書評で取り上げること自体の位置づけをはじめに記しておきたい．

遺跡はそれぞれの時代の地形環境のなかに選地して形成され，時を経て現在の表層地形の上に残されている．遺跡の保護は本来周辺の自然環境の保護と統合されて議論されるべきであるが，行政上の分野の分割による対象の縦割りによって一体的な保護の運用ができていないのはどこでも共通している．黒耀石研究センターは，南に八島ヶ原湿原をひかえ，大門峠から美ヶ原までのビーナスラインに近接しており，長期的に見れば山岳の環境保全に無関心ではいられない．3000m峰を15座有する日本随一の長野県は，高原，湖沼，田園地帯など変化に富んだ地形をふくめ県の財産である山岳環境の持続的利用にむけた方策と持続的利用に必要最な方針を提起している（長野県2016）．また早く21世紀初頭に，ビーナスライン沿線の保護と利用を探る提言が，自然観察インストラクター，自然保護レンジャー，学識経験者，土地所有者，地元観光団体，長野県自然保護課をふくむ地方自治体関係者で構成する研究会でだされている（ビーナスラ

1　東京都立大学名誉教授
＊　責任著者：小野昭（ono@tmu.ac.jp）

イン沿線の保護と利用のあり方研究会2004)．これらは数ある提言や方針のごく一部に過ぎないが，通覧すると対象地域内の詳細な記載がなされ，きめ細かさが際立っている．当然であるが，山岳とベルト状の地域に絞った方針と提言であるので他の要素には触れていない．

今日，経済が金融化，グローバル化し，国の観光立国への過激な傾斜も加わって，どこでも一律化，均一化が顕著に進行している．これは長野県だけでなく，世界各地で起きている事態である．山岳環境の保全だけでなく，長野県内の地域の経済構造をふくむ将来の環境保護の理念はどうあるべきかが今後議論されるべきであろう．

こうした現状を大局的に見るとき，今回書評で取り上げる著書は事例が日本ではないものの，ヨーロッパアルプスの抱える問題を包括的に扱い，将来どのような理念のもとに進むべきかを大胆に問題提起していて，日本の事例にも共通する論題が多くふくまれている．日本の現実も頭の隅に置きながら書評のかたちで紹介し，最後に二三のコメントを付すことにした．

２．本書の目次構成と内容

本書の対象はヨーロッパアルプスである．本書における問題の扱いは個別事例を拾うのではなくアルプス全体を包括的に扱っている．本の副題にもあるとおり，何か具体的な解決を実現したということではなく，あくまでも論争の書である．目次を以下に掲げる．全体は３章からなる．節を追条的に紹介することはせず，特徴的な点を拾って適宜まとめながら内容を要約することにしたい．なお，著者のベーツィンクは1949年生まれで1988年から1995年までスイスのベルン大学地理学研究所の講師，1995年から2014年までドイツ・バイエルン州のエアランゲン－ニュルンベルク大学の文化地理学の教授を務めた．専門分野の仕事だけでなくアルプス研究や，アルプスをめぐる政治上の問題にも多くの書作と発言がある．またアルプスおよびアルプスの問題を調べるのに便利な『アルプス小辞典－環境・経済・文化－』の単著もある（Bätzing 1997）．

序文：なぜこの論争の書なのか
11のテーゼ
Ⅰ　現実の状況について：荒れ果てるアルプス
　荒れ果てたアルプス１：自然と環境
　荒れ果てたアルプス２：経済と文化
Ⅱ　アルプスにどんな未来があるのか：５つの立場によるみとおし
　前置き
　「現実的な」展望：現代化への接続
　新自由主義の展望：すべてを巨大都市のもとに
　快楽主義の展望：レジャーパークの楽しみ
　基盤の展望：水城とエネルギーの泉としてのアルプス
　断固たる過激な自然保護の展望：すべてを自然の原野のままに
　５つの展望すべてに共通する点
Ⅲ　時流に追従しない展望：脱中心化の生活と経済圏としてのアルプス
　なぜ時流におもねることのない展望か
　時流に追従しない１：解決の鍵になるファクターとしての金銭ではない文化的な価値
　時流に追従しない２：価値の脱中心化の可能性
　時流に追従しない３：自然保護の手段に適した利用
　時流に追従しない４：単一の構造によらない多機能的な利用
　時流に追従しない５：グローバル・スタンダードによらないアルプス固有の解決
　総括
　みとおし：周縁的な生活圏：ヨーロッパにおける「地域のよりよい生活」の手本
付編
　参考となる Website 一覧
　関連の参考文献

序文と11のテーゼ：本書執筆の意図を記している．アルプスの将来をどのように見るべきかの問いには多くの論争があるが，著者は結論的に２つの契機を挙げている．第一は，アルプスを共有する諸国（オーストリア，ドイツ，スイス，フランス，イタリア）では国民生活の経済圏としてアルプスは重要であるという共通の認識が

あったが1970年代におきた環境保護運動はこの前提をくつがえした．しかしそれは1990年代までは比較的小さなグループであった．第二は，1989年の大きな変化である．新自由主義の思想の出現は将来のアルプスについての論争を全く異なる方向へと導いたのであると．続いて11のテーゼを記しているが部分的に重なるところも多い．要約すると，多様で小規模な文化的景観をそなえたアルプス特有の生活と経済は，都市化と居住地の放置によってこのままいけば消滅する．観光化の波はアルプスの地形表面が保護されず，300ほどある集中的な観光施設の設置で小規模な観光地が消滅している．過度な観光による水収支のバランスの崩れも心配で，このまま開発が進めばアルプスの実り多い素晴らしさは，過度の都市化と荒れ果てた地域に二分されて落ち込んでいく．

アルプスの現実はアルプスだけの問題ではなくグローバル化した開発の現れであって，こうした開発を拒否することによって初めてみとおしのあるアルプスの未来がある．アルプスの資源利用の脱中心化，特に地域の質の高い生産物，多様な文化的景観，固有の生活と持続可能な経済のありかたが維持されなければならない．アルプスが孤立するのではなく，生産物などの動きがアルプス域外からのみ，逆に域内のみに閉鎖されるのではなく双方的利用が重要である．後に展開される論点が既にテーゼとしていくつも記されている．

Ⅰ　現実の状況について：見誤ってはならない点を二つ記している．第一は，アルプスを見ると巨大で力強い自然景観と思い込むが，これは誤りである．見ているのは自然のままのアルプスではなく，それは先史時代以来の長年にわたる人間の二次的な自然改変による文化的な景観をみているという点である．第二に,「観光」vs「自然景観の中に調和する山岳農業経済」という対抗的設定は誤りである．自然の回復に対応した時間をかけたサイクルの利用形態が保たれるかどうかが問題である．文化的景観の保持は重要である．しかしそれが観光の圧力で強制されると，そこの住民は「観光ゲットーの中で見せかけの牧歌的なハイジを演ずることになってしまう」と著者は警鐘をならしている．

Ⅱ　アルプスにどんな未来があるのか：アルプスの未来には解決できない多くの問題がある．５つのみとおしは，同じような重要性，可能性，現実性を保持しているのでないが，将来像に関して相互に衝突する論争と課題があり，こうした観点から検討されている．

５つの立場は目次の節のタイトルをみればおよその内容は解るが，最初の「現実的な」展望：現代化への接続，は少々わかりにくいかも知れない．それはこういうことである．地元の政治家の多くが期待するアルプス山岳地域の近代化，経済発展である．内容は基盤の整備，新住民の受け入れ，地元の労働市場の拡大による税収の増である．これは大規模なヨーロッパの平地における経済発展モデルであって，地形環境がまるで違うアルプスでは高費用の負担となり，不可能であり問題にならないと著者は明言している．

みとおしの中でアルプスに最も不適合で危険であるのは新自由主義の展望である．著者はここで現代のグローバル化の顕著な背景を明示している．1970年代80年代の経済成長期には，ドイツでは「どの地域でも共通で区別ない生活条件の保証」が経済発展のもとに了解し合う意識があった．しかし1989年1990年の社会主義体制の崩壊は冷戦の構造である「資本主義」vs「社会主義」の対抗構造を崩壊させ，資本主義一本のグローバル化へと大きく変化した．大都市中心のインフラ整備は大都市ではたとえ大きな問題が生じなかった場合でも，人口が希薄で小規模・周辺的な地域では大問題であった．アルプスはこの影響を大きく受けた．なにごとも小規模なアルプス域はこの発展から外れ，病院，学校，郵便施設，銀行，歯科医療，薬局，商店など今の生活に不可欠なインンフラがスプロール化して手薄になった．気候の温暖化による山岳の自然災害にも費用がかさむようになった．経済のグローバル化は1990年代には徐々に，しかし21世紀に入ると巨大な力で急激に進行した．しかしアルプスに接する国によって大きな違いがあった．オーストリアとイタリアは分散的，ドイツのバイエルン州は中間的，フランスは中央集権的，スイスは新自由主義的対応が最も進みグローバル化の中心地域となり，同時にスイス人（ヘルウェティイ）[1)]のアイデンティティーの強調が進んだ．スイスの都市化したアルプスの一部は「都市網」の名の下に「アルペンリゾート」として集中化した観光に組み込まれていった．つまり，グローバルな競争的ヨーロッ

パへの適合的貢献の道をすむことになったが，この立場ではアルプスの将来は見えない．

快楽主義の展望，の帰結だけを記せば，招来するものはアルプスの多機能性の欠如が助長するレジャーパークとしての単一機能化である．このレジャーパークは，従来あった１）素晴らしい自然景観を愛でる，２）山歩き，３）本格的アルピニズム，のどれとも調和しない．

５つの展望に共通するのは，「観光」，「水とエネルギー」，「野生」にかかわることである．５つに要約した展望は今まで多様に議論されてきたし，これ以外の別の立場があるわけではない．アルプスは単に大都市を補足するためにあるのではないが，５つに代わる完全で純粋な代案はもはや考えられない．

Ⅲ　時流に追従しない展望：これは，時流におもねることのない５つの展望を論争のために絞り出した感が，評者にはある．アルプスの将来の問題はアルプスに特殊化した問題ではなくヨーロッパ全体の問題でもあるが，展望は将来解決可能な形で，つまり一つの理想的な形ではなく，具体的で転換可能な形で提出される必要がある．「時代に追従しない１」でいわれている，金銭ではない文化的な価値とは，文化財のことではなく地域の伝統的農業が培ってきた農機具を含む農業生産物などを指している．穀物，ウシ，野菜，ワイン，トチノ実，果物，木材，希少な岩石，水，毛，ウール生地，硫化鉱など，地域色豊かな質の高い伝統的産物を責任をもって生産することを意味している．

「時代に追従しない２」は，本来アルプスの資源が分散的であり中央に集中する形ではなかったことを示す．脱中心的で局所的な生活と経済圏が地場の生産物の価値を引き上げてきたのである．著者はここでごく簡単に，16～19世紀ならびに1965年の状況を紹介している．

「時流に追従しない３」は，現代の経済の強力なグローバル化の競争は何でも集中利用の形態をとると指摘する．自然の保護は喫緊の課題であるが，アルプスの自然と環境問題の特徴は，人間の関係していない自然ではなく，伝統的に形成された文化的土地景観をどう護るかの問題であると．

「時流に追従しない４」は，現在の経済的生産体制は集中と分散は不可避で，例えばアルプスのある地域では車の窓枠だけを造るというように，分散してはいるがそこでは単一のパーツだけを分担し，完成される製品の全貌は詳細不明のままであるという点で，多機能的利用ではない単一の構造と著者はとらえているようだ．地域の喪失（Ortlos）とも表現している．ここは具体例が示されないとやや理解しにくい節である．

最後の「時流に追従しない５」は，グローバル・スタンダードが，大規模化，単一化，広がりの世界性，進歩的に見える借り物性，文化的多様性の抹消，同一化による心の貧しさ，文化喪失などを惹起するととらえる．一方個別の解決とは，小規模な標準化，在地環境との接合，在地型への変形と適用の必要性を強調する．「総括」して，ヨーロッパ中心部に飲み込まれて一体化するのではなく，資源においても双方向の使用と利用が可能な状態を展望している．脱中心化の生活形態と責任を「アルペンラベル」としてアイデンティティーを示すことの重要性で結んでいる．

最後の「みとおし」のところは，何度も強調して書かれているが，アルプスの自然は人間によって改変されてきた自然であり，したがって資源の利用には生態学的な安定性が担保されていなければならない．長期的にはアルプスにもヨーロッパ全体にも，無数の生活地点のより良い生活がゆきわたることを理念的な希望としてを述べ，本書を閉じている．以上で簡単な要約を終える．

３．若干のコメント

要約をとおしても了解されるように，本書はヨーロッパアルプスを包括的に扱い，良い意味でも悪い意味でも理念的あるいはかくあるべしという当為を，将来への見とおしとして記述している．それは具体的な解決の結果や状況の報告ではなく論争のための論点を提示するために書かれているからである．アルプスを取り巻く５か国の状況はそれぞれ異なり，またアルプスの中も，地形面の傾斜，谷部，山腹，高地，日射の関係など，地域的にモザイク状を成して均一ではないが，アルプス内の個別の事例を拾うことは避け，直面する全体的な状況の分析に主力を置いている．

現在世界各地にみられるグローバル経済の特徴がアルプスにもどのように現れているかを，他のヨーロッパの大都市との関係において議論している．EU の問題もいくつか言及されているが EU 全体の経済政策についてはほとんど触れていない．それは EU 全体と EU を構成する各国民国家との関係の分析がなければ無理であることと関係しているのであろう．アルプスは地域的に多様であることを随所で記しているが，新自由主義的なグローバル経済の政策がアルプス全体にどう影響したかを総論的に扱っているため，多様なアルプス域内にそれがどう表れているかをいくつか事例をあげて説明されていればもっと具体的に理解できたと思われる．本書が145頁の小著である点も影響しているだろう．事例の説明がなく総論的に議論しているため，アルプスの中の小さな村のさまざまな実践は全く表面に出てこない．しかし，特定の村や谷を事例研究として取り上げ，山岳景観の保全と観光やグリーン・ツーリズムに関する新しい方法の紹介などは多数あることを，誤解のないよう念のため評者として記しておきたい（横山2007，2008）．

時流に追従しない展望を５つに絞って整理しているのであるが，これは将来に向かってありうる展望を何とかカテゴライズしようとしたせいか，「時流に追従しない３：自然保護の手段に適した利用」，「時流に追従しない４：単一の構造によらない多機能的な利用」，「時流に追従しない５：グローバル・スタンダードによらないアルプス固有の解決」などの節の内容に重複も見られ，また理想を語りすぎている部分も散見される．論争のための論点の提示，ならびにそのすぐ先，しばらく先，はるか先，先に行っても十全には解決しがたい諸課題を提起しているのだ，と了解すれば良いのかも知れない．

本書は日本列島から１万キロも離れた彼の地の大状況であるが，日本の中部山岳地域における自然保護の問題を考える際に共通する多くの問題を発見できる．われわれはある課題の問題点を解決しようとするとき，どうしても具体的施策をまず考え，実現するための運動論を組み立てようとする傾向がある．面倒でも，理念は当為の問題としてきちんと議論しておくべきことを本書は示しているのではないか．運動論や施策で躓いて立ち止まった時は，原則に立ち返って再出発するという「原則」に照らせば，理念の議論は重要であることを本書は示している．

謝辞

本書を筆者に手渡してくれた，当時インスブルック大学の D. シェーファー教授に感謝したい．2015年の夏，科研基盤 B の研究課題で北チロルの2000m 級の山岳地にある中石器時代の遺跡の巡検を D. シェーファー教授と S. ベルトッラ博士の案内で島田和高，橋詰潤，吉田明弘氏らとともに実施した．そのとき，調査のためチロルの山岳地を20年以上にわたってくまなく歩いてきたシェーファー教授が刊行直後の本書を，アルプスに関する重要な問題が提起されているよ，と手渡してくれたのである．巡検は天候に恵まれ，快晴．抜けるように深い青空，それを切り裂いて屹立する岩山，間近にみる氷河，ふもとの牧草地の緑など，日本列島とは異質な山岳の景観美に打ち砕かれる想いだ．本書を読む機会がなかったら，ただそれだけで終わっただろう．目にする景観美の背後に保護と荒廃の表裏一体の力動的関係があることも知らずに通過し，日本の現実との接点も見いだすことがなかったに違いない．

註

1）スイスの国名は英語で the Swiss Confederation あるいは単に Switzerland，ラテン語で Confoeratio Helvetica（CH）という．ヘルウエティア Helvetia の連合の意．現スイス地域に居住していたケルトの部族ヘルウェティイ族 Helvetii をさすが，部族社会は無文字社会であった．カエサルの『ガリア戦記』中に Helvetii 族として出てくるのが文献的出典の根拠である．

引用文献

Bätzing, W. 1997 *Kleines Alpen-Lexikon: Umwelt・Wirtschaft・Kultur*. Verlag C.H.Beck, München

長野県環境部自然保護課2016『山岳の環境保全及び適正利用の方針』長野県環境部自然保護課

ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会2004『ビーナスライン沿線の保護と利用のあり方研究会提言：最終報告書』長野県環境部自然保護課

横山秀司　2007「オーストリア・アルプスにおける生物圏公園について－景観保全とグリーン・ツーリズムに関する新しい方法－」『九州産業大学商論叢』Vol.48, No.1:73-97.

横山秀司　2008「オーストリアにおける山岳景観の保全と観光」『九州産業大学商論叢』Vol.48, No.3:53-67.

Natural Resource Environment and Humans
No. 11. pp. 135-140. March 2021.

Book Review:

Werner Bätzing
Zwischen Wildnis und Freizeitpark: Eine Streitschrift zur Zukunft der Alpen.

Rotpunkt Verlag, 145S. Zürich. 2015.

Akira Ono [1] *

Abstract

This book provides a provocative synthesis on the future perspectives of European Alps in full scale, proposing various questions under the influence of global economic pressures on diverse alpine natural environments. The author symbolically uses a dichotomy scheme of "wildness" or "leisure park" on alpine areas. Contrary to this dichotomy, the author conclusively proposes five alternative perspectives for alpine specific forms of future developments, instead of global economic standardization. Proposed severe discussions of the protection and management of the natural environment and economic development that have discussed in this book will sure to applicable also on the same issues in Japan.

(Received 19 December 2020 / Accepted 25 December 2021)

1 Professor Emeritus, Tokyo Metropolitan University
* Reviewer: Akira Ono (ono@tmu.ac.jp)